第4回「私と新聞」親子作文コンクール

入賞作品紹介 ⑱

中学生の部親子賞 入選

読む 知る 学ぶ E!新聞

私とボランティア新聞

平田村
小平中1年 宗像（むなかた） 千愛（ちなり）さん

「つまらない」。私は、新聞のことをそう思っていました。字がほとんどで、漢字も多い、子供には読めないと。しかし、ふいに新聞を見てその気持ちは変わりました。

それは一月四日に掲載された、山形のボランティアバスについてです。私は、現在も続いているとは知っていました。しかし、バスもあることには、びっくりしました。

ボランティアバスとは、毎月一回、日曜日に日帰りで陸前高田で震災の行方不明者を捜索するボランティアのことです。

また、載っていた写真を見ると少なくともたくさんの年代の方が一生懸命ボランティアを行っている様子が伝わります。私は、若い年代の方はあまりボランティアはやらないと考えていました。しかし、この記事を読んで、私の考えは間違っていることに、気づきました。

このボランティアは、八時間という時間をかけて行っていることにおどろきました。また、約五時間、海水を含んだ重い砂をふるいにかけていることにもです。それに、このボランティアは震災後、激減したことも載っていました。私は、そんなこともあったのにもかかわらず、ボランティアを行っている方々を尊敬しています。

最後ですが、私はふいに新聞を見たことで、新聞が人々の生活の中で大切だということが分かりました。今では、つまらないと思っていたことと、うらはらに、いろいろな情報が載っており、おもしろいと思っています。

これからは、時間があるときは新聞を読み、日常生活に役立てたいです。新聞は日常に必要なものだと私は、考えます。

私と新聞

母 宗像（むなかた）美由紀（みゆき）さん

正直仕事と家事と忙しい私はテレビ欄や気になった事がない限り新聞に目を通す習慣はありませんでした。事件やニュースも他人事に感じていたし身近でそんな事が起こるとも思っていませんでした。あの三月十一日が来るまでは。

今まで福島は地盤が固いから大丈夫だと言われ地震のゆれには鈍感になっていました。いつもと違うゆれに思わず外に飛び出し家が横にゆれ屋根瓦が落ち、ゆれがおさまるのを待ちました。携帯もつながらず家族とも連絡がとれず、その後も余震が続き家族で固まり眠れない夜が続きました。

私は施設で仕事をしているのでどんなに不安でも仕事を休むわけにはいかず余震の続く中、もし今後利用者の方々を避難させる様になるかもしれない。その時私達は一番最後に避難する様になる事を施設長に言われ心中は複雑でしたが、利用者の方々を放り出す訳にはいきません。

津波がせまる中最後まで避難を呼びかけていた方々。色々な事を新聞から多く知りました。他人事とは思えません。いわきナンバーで車にいたずらをされた方もいます。

年月が経ち地震が来て少しゆれても慣れてしまっている自分もいます。私達は幸せです。同じ所に住めて変わらない生活をしている。新聞で復興のイベントや頑張っている様子、笑顔の記事を目にします。テレビでは伝わらない新聞の良さをこの年になって感じています。

私には大した事は出来ませんが今の生活におぼれない様に仕事、家庭の事を頑張っていこうと思います。震災を通してですが今は少しの時間を見つけ新聞に目を通す様になりました。これからも見続けていきたいと思っています。